

# 北社会ニュース 第31号

2007年4月18日

発行者：鈴木壮夫

“十五才の春・70人の乙女達の決意と実行”

今春男女共学になった母校で4月9日、入学式が行なわれ女子70人、男子252人、合計322人が高校生活のスタートを切った。

新入生は一人一人名前を読み上げられて起立、1900年の創設以来初めて女子生徒の元気な返事が体育館に響いた。一年生は八学級あり各クラスで女子も男子も机を並べて学ぶことになる。新入生の女子生徒は記者の問いかけに

Yさん 「伝統や校風に魅力を感じ、どうしても入学したかったので嬉しい。  
勉強はもちろん、大好きな吹奏楽も続けたい」

Rさん 「初の女子という点はあまり意識してないが、男子に負けないように  
がんばっていきたい」

Wさん 「勉強と部活の両方を頑張っている、あこがれの二高に入れてうれしい。  
女子は少ないけれど仲良くしていきたい」

このように、胸を高鳴らせ笑顔で抱負を語ったと新聞各紙が報じている。

西澤潤一同窓会長は祝辞のなかで「わたしは共学化に反対だったが、なったからには女子生徒にも素晴らしい成果を身につけてほしい」とユーモアを交えて激励したとも。柏葉浩明校長は「共学という新しい枠組みとなった。伝統を創造的に継承してほしい」と語り掛けたと河北新報は報じ、毎日新聞では「男女の別なく学校生活を送る機会が与えられたことを心から喜びたい」と式辞を述べたと報じている。

入学式を報じた各紙のタイトルは

河北新報 “伝統へ新風吹き込む” 仙台二高 男女共学 初の入学式  
朝日新聞 “創設から1世紀 女子はつらつと” 共学化 仙台二高入学式  
毎日新聞 “男女共学化の仙台二高で入学式”

各紙とも写真入り、女子生徒に的を絞っているのは申すまでもないこと。

そして、柏葉校長先生にお願いしておりました入学式での式辞がFAXにて届きました。四百字原稿用紙に換算すると十数枚になりますが、歴史・卒業生の業績・新入生に求めること・そして学校の責任と支援等々私は数回読み返して校長先生の決意を理解しました。FAXのコピーですので読みづらいと思いますが添付しますのでご一読願います。

本欄のタイトルを“十五才の春・70人の乙女達の決意と実行”としました。新聞各紙を通読している内に、二高を志願して入学した乙女達のことを脳裏を離れませんでした。70人のほとんどが宮一女高にも合格できる実力を保持し、而も来年は同女子校も共学になる、同程度の実力者の内、二高を志願せず、一女を選択した乙女達も多いと思う。十五才の春の選択にエールを捧げ、西澤会長同様素晴らしい成果を心から祈りたいと！

## (1) 本日・第250回北社会

講師：阿部 孝氏（高27回）「インターネットその進化する世界Web2.0」

昨年2月15日・第239回からほぼ一年ぶりの登板を引き受けていただきました。前回は～ネットで変わるビジネス～がテーマでした。昨年もそうでしたが、本日もお話しについていけるかどうか期待と不安が交差している私です。

《昨年、講演終了後、阿部さんにどこの中学校の卒業ですか？と問い掛け私と同じ上杉山と知り、それでは家は？と重ねてお聞きして分かったのは当時私が毎月お世話になっていた床屋さんが生家だと聞かされビックリ。その当時阿部さんが生まれたのです。》

## (2) 来月以降の北社会

講師のご都合及び会場手配等にて7～9月は7月17日（火）、8月20日（月）、9月は金曜日開催を予定しておりますが、エドモントでは予約が取れません。【9月7日、14日、21日の何れかどなたか会場の心当たりありませんか】

5月16日（水） 日野克彰氏（高32回）にピンチヒッターをお願いする可能性が大きくなりました。区議員選挙を戦った実態を報告してもらいます。

## (3) 日野克彰氏にご支援を！ 豊島区区議会議員選挙

22日投票日に向けて日野氏は区議会選挙を戦っております。12日（木）東長崎駅前の選挙事務所を訪問、激励してきました。道幅が狭い小路に事務所があり、目の前には自民党候補の事務所すぐ近くには公明党候補の事務所。いずれも日野事務所に比べればばしい。特定の政党や団体等から、支援もそして拘束も受けない日野氏の活動に私はあらためて好感をいただきました。38人（？）の定員に60人位が立候補予定とのこと。日野氏は今回三期目の挑戦です。北社会の世話人としても協力してもらっております。

＊豊島区にお知り合いの方がおられたらどうぞご推薦・ご支援お願いします＊

## (4) 城山三郎さんを悼む

先月22日、北社会を終えて帰宅して城山さんの訃報に接しました。翌々日の24日、毎日新聞「余禄」・朝日新聞「天声人語」・読売新聞「編集手帳」に追悼コラムが掲載された。三紙とも同じテーマというのも珍しい。そんな中、詩人で作家でもあり同年の生まれ79才になられる辻井喬さんの追悼文「サムライを求めたサムライ」に強い印象を受けた。城山さんが描こうとしたのは人間の志の高さが放つ輝きなのではなかったのか。またその志を抱きながらも現実に敗れていく時の本質的な哀しさであったのだと、なぜ自らの損得にこだわらず、大義に立って行動する人物―サムライ―がいなくなったのかと！